

# 少年事件 Q&A

## 【テーマ】

初めて少年事件を担当するが、少年との面接ではどんな点に気をつければよいか。

## 【解説】

### ①少年の立場を理解する

少年との面接は難しい。何も話してくれず、沈黙が続くこともあるし、全く事件のことを反省していないような態度に、弁護士自身が途方に暮れることもある。しかし、少年が現在置かれている立場を理解しよう。突然の逮捕、身柄拘束で、少年は混乱している。おびえている。不安でいっぱいである。このような状況の中、自分の思いを伝えられる少年のほうにむしほ珍しいと心得てほしい。

また、少年は、大人に自分のことを説明する機会が少ない。中には家庭にも学校にも関心を持たれないまま成長し、逮捕されて初めて大人とまともに向き合う少年もいるのである。まずは少年との信頼関係をつくるのが大事である。

### ②安心感を持つ話題づくり

少年が安心感を持つような話題から心をほぐしていく。事件には関係ない友達のことや家族のこと、趣味の話、日常生活など、きっかけは何でもいい。そして、この会話の中で、少年の言語能力や理解力を判断して、自分が難しい言葉を使いすぎているかのチェックもしてほしい。少年の言語能力は、大人の想像以上に低いことが多い。

### ③事実の聞き取り

事件の話に入っても、結論を急ぎすぎたり、要点だけを求めたりはしない。ときどきこちらで要点を確認しながら、ゆっくり事実を聞き取っていく。法律的には些少でも少年にとって大事な食い違いというのを大切にしてほしい。

また、「なぜ」という質問は極力避ける。なぜ、と聞かれると、批判されているように受け止めるからである。どうしても聞きたい場合は、「何か理由がありましたか」などのように質問をかえる。

この過程で、捜査機関からの自白の強要が明らかになる場合もある。強要といっても、暴力を伴うことに限らない。「自分のことなんか誰も信じてくれないから、本当のことを言わなかった」といった形の自白の強要がなされることは多いのである。えん罪であった場合などの争い方はLIBRA2004年3月号P.27を参照してほしい。

### ④頭ごなしの叱責・説教はNG

頭ごなしに少年を叱責したり、説教することはしない。少年は説教も叱責も聞き飽きている。わかっているがやってしまう自分をもてあましてもいる。そんな思いを受け止めることが付添人の役割である。自分のことを受け止めてくれているという安心感があって、初めて、少年は心を開き、言葉を聞き始めるのである。

### ⑤沈黙への対処

少年が「そのことは話したくない」と言ったり、ある特定の質問に対して沈黙するような場合は、「そのことは話さなくていいから、話したくない理由を教えてくださいませんか」などと周辺を聞くことにより、重大な事実が浮かび上がることもある。

### ⑥まとめ

以上、いろいろと注意点を述べてきたが、要は、ひとりの人間として真摯に少年と向き合うだけである。少年にとって付添人との出会いは、「自分の人生の中で、一番最初に一生懸命に話を聞いてくれた人が弁護士さんだった」と言う少年もいるほど、人生が大きく転換する得難い経験になることもある。このような場面に立ち会える喜びは、ほかの仕事ではなかなか味わえないものである。

(子どもの人権と少年法に関する特別委員会委員  
西田 美樹)